

急速に変化した住宅都市におけるコミュニティの形成過程について —茨城県牛久市を例として—

国土館大学工学部 学生会員 ○伊藤 美智子
国土館大学工学部 正会員 二井 昭佳

1. 研究の背景と目的

近年、日本各地で盛んにおこなわれているまちづくりでは、まちの歴史や文化、地形などの自然環境が手がかりとして注目されることが多い。しかし、人々の暮らしによりまちが成立していることを考えれば、そこで形成されているコミュニティも同時に把握することが、非常に重要だと考えられる。

コミュニティの形成過程を知るには、空間利用の変化が緩やかな地域よりも、短期間に急激な変化を遂げた地域の方が適していると考えられる。そうした場所では古くからのコミュニティに新しい人々が混じりあったり、それまで人の住んでいなかった所に新しくコミュニティができたりと様々な形成過程が想定されるからである。

そこで本研究では、ある時期に急激に変化したまちとして茨城県牛久市を取りあげ、住民の交流を目的としたイベントに注目し、①まちの変化とさまざまなイベントの開始時期との対応関係、②まちの大きな行事として定着しているイベントのきっかけや、開始時あるいは、継続的に発展させていくための工夫について明らかにすることを目的とする。

2. 研究の対象と方法

本論文の対象地は茨城県牛久市とした。その理由は、牛久市が①昭和45年前後を境に急激に人口が変化した地域であること、②現在まちづくりに取り組んでおり、コミュニティの変化の把握が今後のまちづくりのヒントになると考えるからである。

研究の方法は、まず牛久市の人口、空間、イベントの変遷について牛久市史や広報等の文献、地形図等により把握する。また、さまざまなイベントの中で人口が急増した時期に始まったうしかっぱ祭りについては、文献が少ないため関係者への聞き取り調査によりイベントの詳細を把握する。それらの調査結果をふまえて考察をおこなう。

3. 牛久市の変遷とコミュニティの変化

(1) 牛久市の人口変化と空間変化

牛久市は茨城県南部に位置し、西南の一部は牛久沼にのぞみ、水と緑の豊かなまちである。

昭和45年以前は集落が点在する状況であったが、その後の10年間に集中的に区画整理や宅地開発がおこなわれ東京のベッドタウンへと変化した。それに伴い人口は牛久町だった昭和28年の1万5千人程度から、現在では7万8千人になっている。特に昭和45年から昭和60年の15年間に3万人増(2.5倍)と急激な変化をしている(図-1)。

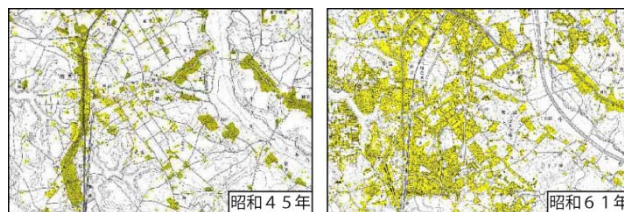


図-1 地形図に見る牛久市の変遷

(2) さまざまな交流

牛久市では、人々の交流を目的としてさまざまな活動や行事が行われてきている。これらを交流単位により分類すると、①老人会や子供会といった行政区内の交流、②文化祭や野球大会といった趣味・職業別の交流、③花火大会やうしかっぱ祭りといった市民全体の交流の3つに分類することができる。なお③は、前者が受動的な参加形態であるのに対し、後者は能動的な参加形態だという特徴がある。(図-2)

(3) まとめ

牛久市の変化とさまざまな交流単位の開始時期を対照させると、市民全体の交流の開始時期が人口の急増初期にあたっていることがわかる。さらに花火大会が3年間しか続かず、その後うしかっぱ祭りへと変更されたことをみると、より市民が積極的に参加できる行事が求められたと考えられる(図-2)。

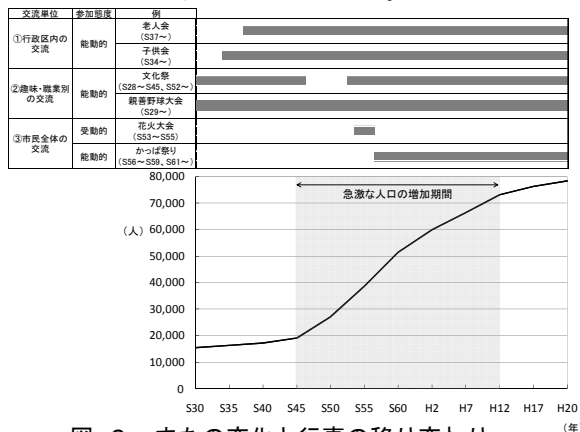


図-2 まちの変化と行事の移り変わり

キーワード：コミュニティ、イベント、まちづくり

連絡先：〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1 国土館大学 TEL：03-5481-3261 E-mail：g743571p@kokushikan.ac.jp

4. うしくかっぱ祭り

(1) まつりの概要

うしくかっぱ祭りは、新旧住民の交流のために昭和56年に「ふるさと祭り」として始まり、27回目を迎えた。祭りの中心は、列になって踊るパレードである。2日間あるパレードへの参加者は現在、10000人を超える。毎年7月の最終週の土日に開催され、動員数は20万人を超え、茨城県内で3本の指に入る程の祭りになっている。

(2) 祭りの詳細と現在までの変化

1) 運営主体の変化

祭り開催当初は行政が主体となり運営していたが、運営費、市職員の負担増等の問題や、市民の手による祭り運営を目指すものとして、第11回目以降は、市民による実行委員会へと運営主体が移った(表-1)。

祭りの土台となる初めの運営を市が行うことで、初めから多くの市民の参加がうかがえる。また、時期をみて市民による運営することで、市民の手で行われる祭りとなり、継続されていくものとなった。

表-1 運営主体の変化

回数	運営主体	主催	備考(新たなイベント等)
1~4回	行政	牛久市、牛久町商工会、牛久町観光協会	ふるさと祭りとして開催(1回)
5~10回	行政	牛久市観光協会	
11~27回	民間	うしくかっぱ祭り実行委員会	牛久スタンプ協会イベント大抽選会(15回~) うちわ抽選会(17回~) かつぱやし踊りパレードコンテスト(18回~) よさこい鳴子踊りパレード(21回~)

2) 踊りパレードの創設と普及活動

牛久市には輪踊りの牛久音頭が存在していたが、誰もが踊りに参加しやすい線踊りの河童ばやしを新たに創った。踊りを普及させるために、毎年講習会を実施している。これにより、祭り当日のみでなく、踊り練習の場でも住民の交流を図ることができるという効果が生まれていると考えられる。

3) 参加団体や人数の変化

踊り参加人数は、行政が運営主体だった10回目までに、5千人から1万人まで増加した。これを人口比率で見ると、当初から一定の割合で市民の参加があることがわかる(図-3)。

より多くの住民が参加できるように、土曜日(1日目)を事業所や団体、日曜日(2日目)を行政区に分けている。それぞれの参加数の変化には特徴がみられる。事業所の参加数は、運営主体が民間に移ってから急激に減ったことから、市運営時のある程度の強制力が伺える(図-4)。また、行政区は、ほぼすべての行政区が参加しており、新しくできた行政区も随時

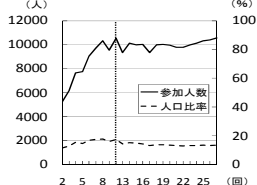


図-3 参加人数と人口比率

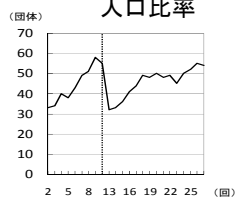


図-4 参加事業所数

加わっている。これは、市運営時からの行政区への働きかけが要因とみることができる(図-5)。

4) 祭り会場の変化

祭りの会場は、現在までに4か所移動している。その理由は、踊りパレードやイベントのスペースが取れない等の理由であり、まちづくりを見据えた場所選びはされていない(図-6・表-2)。

5) プログラムの変化

踊りパレードは参加人数の増加に伴い、踊りがだらけてきたため、第18回目からコンテストを取り入れた。

パレード以外でも、人集めのために第21回目から『よさこい鳴子踊りパレード』を取り入れた。他にも抽選券を付けたうちわを配布するなどして適時祭りを盛り上げる仕組みを取り入れている。

6) ボランティア活動

祭りで問題になりやすいゴミ、駐車違反、喧嘩などは市民からボランティアを募集し、清掃、警備に取り組んでいる。10回目までは市の職員が中心となっていたが、運営主体が民間に移ってからは市民の手によって行われている。祭りの翌朝、地元小・中学校の生徒が清掃に取り組む姿勢もみられる。

(3) まとめ

かつぱ祭りが継続的な成功を収めている要因と課題点を分離し、表-3にまとめた。

表-3 まとめ

継続的な成功を収めている要因	1) 運営主体の変化	市が土台を作ること、参加しやすく、継続するものになる。
	2) 踊りパレードの創設と普及活動	市民に移ること、市民の手による祭りになる。
	3) 参加団体や人数の変化	誰でも参加しやすいものになった。
	4) プログラムの変化	祭り当日にとどまらない交流の場が出来た。
	5) ボランティア活動	参加団体や2日間に分けることで、参加しやすくなる。
	6) ボランティア活動	行政の働きかけにより、始めから参加数が増える。
課題点	3) プログラムの変化	適時変更すること、盛り上げにつながっている。
	4) 祭り会場の変化	市民の手による祭りになる。

4. 結論

①まちの変化とさまざまな交流活動の開始時期を対照させた結果、まちの変化が緩やかな時には、行政区のような小さな交流単位ですむが、急激に変化した際には、市民全体が交流できるような行事が必要とされてくることを指摘した。

②市民全体が交流できる行事を継続的に成功させている要因を5つの項目に分けて整理した。また、まちづくりを意識した上では、市にとって重要な場所で開催することが必要であることを指摘した。

主な参考文献

- 1) 牛久市史 民俗;牛久市史編さん委員会,2002
- 2) 広報うしく縮刷版;牛久市広報課広報広聴係,1979

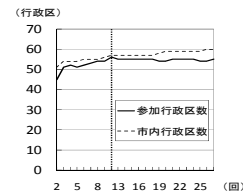


図-5 参加行政区数と市内行政区数

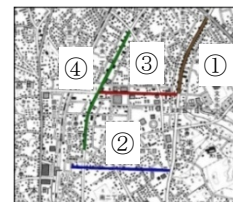


図-6 場所の変化

表-2 祭り会場

場所	地図	回
ふれあい通り	①	1~4、25
けやき通り	②	5~10
田舎中柏田線	③	11
花水木通り	④	12~24、26~27